

東南アジア考古学会 2022 年度オンライン企画：
TAIWAN 考古学セミナー・シリーズ《台湾考古学の新視点》
第 6 回：2023 年 3 月 25 日（土）14:30-15:30 (日本時間)

台湾八仙洞遺跡における新発見 —後期旧石器時代から先土器時代まで—

曾 于宣
国立台湾史前文化博物館

要旨

八仙洞遺跡は、台湾東海岸の海食洞穴群に位置する台湾旧石器時代の代表的な遺跡であり、放射性炭素年代測定によれば 30,000～15,000BP の範囲で人間が活動していたことが確認されている。本遺跡における最初の発掘調査は、1968～1970 年に国立台湾大学の地質学科及び考古人類学科から編成された「八仙洞考古発掘隊」により行われたものである。それからおよそ 40 年を経て、2008～2015 年に中央研究院歴史言語研究所の臧振華らによる二回にわたる発掘調査が実施された。その後積み重ねられた研究の成果として、台湾旧石器時代と先土器時代の関係性や年代、石器製作技術など、当該遺跡における考古学的文化の様相が明らかになった。今回の発表では、八仙洞遺跡に関する研究史と新発見および上述の議題について紹介したい。